

風の便り(第65号)

発行日：平成 17 年 5 月

発行者：「風の便り」編集委員会

2つの「モデルハウス」－2つの「お試しセット」 －広島県「コーチズ」と島根県「リベロ」－

1 新しい時代の「モデルソフト」 *****

第24回大会の「特別報告」において、生涯学習の「広言実行」を提案した。その本意は、プログラムの理念と方法と実行プロセスの「情報公開」である。従来の、社会教育事業は分かりにくい。分かりにくさの第1は、目的が不明瞭であること、したがって結果が提示できないことである。第2は、方法に工夫が足りず、前年踏襲のマンネリ化が続いていて、反省と改善の方向が示されないことである。第3は、上記2点の原因である評価システムの欠落である。生涯学習事業の多くは、「費用対効果」の発想に乏しく、活動成果は「指標化」されていない。具体的な評価が無ければ、当然、改善の方向も方法も示し得ない。結果的に、実行プロセスは公開されにくくなるのである。それゆえ、筆者の主張は他の産業界に倣って「モデルハウス」の公開、「お試しセット」の提供、「体験プログラム」の多様化、「実行マニュアル」の公開等々であった。要は、生涯学習における意識的・目的的な「モデルソフト」

の開発と公開が遅れているのである。筆者が関わった長崎県壱岐市立霞翠小学校の「タフな子どもを育てるモデル事業」は「生きる力」を育てるための「モデルソフト」である。具体的には、体力、耐性、学力、社会規範の育成、家庭との連携、地域との連携、教員集団の発表力などを中身とする学校再編のモデルである。また、福岡県豊津町の「豊津寺子屋」の構想は「保育と教育」を総合化し、高齢者の元気を引き出し、女性の社会参画を推進し、最終的にはコミュニティの活力を向上させるための「モデルソフト」の開発である。当然、モデルソフトは開発の途上にあり、改良を重ねなければならない。それは建築における「モデルハウス」や化粧品における「お試しセット」となんなら変わりはない。生涯学習では「パイロットプログラム」の積み重ねが重要になる。公開して多くの方々の批判と提案を受けることも重要である。公開こそがプログラムの進化と深化を促すからである。

目次

- | | |
|---|------|
| 1. 2つの「モデルハウス」－2つの「お試しセット」－広島県「コーチズ」と島根県「リベロ」 | P.1 |
| 2. 「学校評議会」のTPO -なぜ「すぐれた学校」に「素人の意見と権限」を入れるのか? | P.4 |
| 3. 徒労のアンケート 悪しき「員数主義」 | P.6 |
| 4. 女子学生の質問 「女はなぜ子どもを生まないか」 | P.7 |
| 5. ななめ読みの感想 ～平成17年5月29日日経新聞日曜版～ | P.8 |
| 6. Message To and From | P.10 |
| 7. 編集後記:時間消費の質 | P.11 |

2* 金のとれる生涯スポーツ –広島県「コーチズ」– ****

今大回の発表には4つのNPOの活動報告がそろった。佐賀県武雄市の谷口仁史さんが発表した「NPOグループによる不応問題に関する総合支援体制の創造と実践」、鹿児島県鹿児島市の後田逸馬さんの「NPOかごしま生涯学習サポートセンター設立の目的と経過」、それに表記の二つである。筆者には別の興味と関心もあって、全部を聞くことはできなかったが、選択的に表記二つのNPO法人の活動を聞いた。いよいよ時代が動き始めた、という実感をもった。日本社会のマーケットに出しても、「金のとれる」生涯学習が始まったというのが総括的な感想である。「コーチズ」の活動も、「リベロ」のプログラムも、生涯学習市場の需要に対応している。「コーチズ」は、生涯スポーツが介護予防と密接に関わった「証拠」を提示している。指導者の派遣は「健康づくり運動教室」に重点がおかれ、そこで稼ぎ、雇用を創出している。コーチズの活動は初めから生涯学習を目的としたわけではない。スポーツを特技とする人々が後継者の「コーチ」を思い付き、あわせて雇用の創出を目指した結果が生涯スポーツ分野への進出につながったという。青少年の指導ではまだ飯が食えないので、実践の試行錯誤の中から高齢者の健康指導に活路を見

い出した、という児玉宏代表の説明が印象的であった。学校中心主義の日本では、学校外で専門家に金を払う習慣は「塾」と「家庭教師」以外にはないのであろう。

「コーチズ」の経営も企画も徹底した現場主義である。立ってソーラン節を踊れない人々には、椅子に坐ったまま踊る「座・ソーラン」を開発した。軽快なソーラン節のリズムに乗って椅子に坐ったままのソーラン節を踊る熟年者はやがて立てるようになる。健康体操に使用する特殊なボールも開発して年間一千万円を売り上げるとの報告もあった。紹介された映像の中の人々の楽しそうで、躍動的な動きを見れば、コーチズの指導がいかにも有効であるか、容易に推定できる。少子高齢化のなかの生涯スポーツは、「医療費の削減」でも、「子どもの生きる力」でも、現行の”鳴かず飛ばずの”「行政主導型」プログラムを民営化して行けば、企業化できるのである。コーチズは指導のプロセスにおいて、雇用をつくり出し、その雇用機会を暴走族少年達の立ち直りに活用することもできた。行政では、福祉と教育の共同化というようなたった一つの縦割りの壁すら打ち破ることはできないのにNPOは軽々とそうした規制を乗り越えてしまうのである。

3* 成果で勝負一島根県「リベロ」 ****

「リベロ」のサービスも「コーチズ」と同じく有料である。浜田市の生涯学習「お試しセット」プログラムは機能している。「リベロ」は「働くお母さんの子育てと仕事の両立をお手伝いします」。「リベロ」の活動は学校週5日制対応の不備と学童保育の不十分を補い、子どもの安全を考慮し、家族の不慮の事態に対応して子どもを預かる。不登校にも対応する。「リベロ体験基地」は子どもの「生きる力」の向上も

請け負う。長期の休暇中には体験と学習サポートを組み合わせた「スクーリング合宿」も行う。“「民」ができるものは「民」へ”、のスローガンのもとに、各種の規制を取り払った「特区構想」を提案した小泉総理大臣に聞いていただきたいものだと思って聞いた。

現行の子育て支援システムでは学校の振り替え休日には対応できないことが多い。学童保育の

大部分は年齢制限があり、小学校の3年生までしか対応しない。実績が証明する通り、学校カウンセラーでは不登校や引きこもりを解決することは絶望的であり、最悪の公金の浪費の一つであると筆者が指摘し続けている通りである。「リベロ」や佐賀県武雄市の「NPO グループによる不適應問題に関する総合支援体制」はそうした難問に効果的に取り組んでいる。現在、学校カウンセラーに払っている

給料は、プログラムの効果を確認した上で、民間への委託金に廻すべきであろう。

現在の子育て支援システムでは、不意に発生する家族の必要に対応する保育の仕組みはほとんど存在していない。「リベロ」は子どもの送迎までサービスに含めて、天晴れにもその「空白」を突いたのである。

4* 20世紀型プログラムの終焉****

生涯学習推進行政には今や金はない。職員も急激な減少傾向にある。理由は明解である。行政主導型の生涯学習は暮らしの役に立っていない、ということである。生涯学習理念が珍しかった頃はともかく、現行の生涯学習施策では政治家は選挙には勝てない。住民の意識のレベルで見れば、現行の生涯学習プログラムなど選挙の争点にもならないであろう。それが近年の生涯学習の実績に対する政治の評価／判定である。20世紀のプログラムの役割は終わった。それらは「行政主導」に代表され、趣味と教養とスポーツを組み合わせた「学級・講座」型が主流であった。公金を投入し、成人市民の意欲の高い層を主たるターゲットとした。「民間ではやらないから」という理由で、理屈っぽい啓蒙型・説教型のプログラムを極々少数のお義理の受講生のために今も続けている。行政が何と理屈を付けようが、政治勢力が圧力をかけようが、生涯学習革命の洗礼を受けた新しい日本人にはすでに「動員」は効かない。「男女共同参画」も、「人権講座」もがらがらなのはそのためである。個人の「選択」が生涯学習の原理となった以上、人々が選択しないものに参加は得られない。異分

野と統合し、市民の生活必要に根ざした魅力的なプログラムが組めない以上、社会教育が「お客」を失うのは必然である。

反対に、「コーチズ」も「リベロ」も21世紀のプログラムの象徴として登場したのである。「お客」の必要に答えようとしている。人々もようやく行政依存の甘えを自覚し、自分の利益のためには「対価」を払うことを学び始めている。多くの生涯学習プログラムにおいて「受益者負担」の原則を阻んでいるのは行政の側である。結果的に「安かろう、悪かろう」のプログラムはさらに「お客」を失うことに気づいていない。このように書くと「経済負担に耐え得ない層」を無視しているという批判を招くが、本気で「貧困層」の生涯学習をやろうとするのであれば、(前にも提案したことであるが、)かつて「公明党」の提案で全国にばらまいた「地域振興券」を徹底改良して「生涯学習振興券」として支給すればいい。多少の金はかかっても人々が健康学習やスポーツに取り組み、現代的課題についての知的レベルを向上させることになれば、立派に税金の元は取り返せるというものである。

「学校評議会」の TPO

—なぜ「すぐれた学校」に 「素人の意見と権限」を入れるのか?—

◆ 1 ◆ 「常識」の導入

各地で「学校評議会」制度のモデル研究が始まっている。従来の学校の閉鎖性を打破するためには一つの妙薬であることは間違いない。しかし、薬の効き目はタイミングとさじ加減次第である。すべての学校に「学校評議会」が必要になるわけではない。「効用」がでるかどうかは、学校次第、状

況次第である。では、「学校評議会」はどのような状況にとって有効なのか? 「学校評議会」に TPO の配慮が問われなければならないとすれば、それはどのような条件下にある学校なのか? 学校を選択、教育状況の判断を間違えれば、外部の素人集団の「評議」は逆効果をもたらすのである。

◆ 2 ◆ 両極の典型

筆者は学校の両極の典型を知っている。一つはどうにもならぬくらい無気力で、怠惰で、閉鎖的で、誰のいうことにも耳を傾けない独善的な学校である。他の一つは、教職員が意欲に燃え、勤勉で、学校に沢山の応援の方々をお招きし、常に実践を外部に開いて評価を受けようとする姿勢を貫いている学校である。当然、社会的に目立つのは後者

である。教育行政が頼りにするのも後者である。したがって、新しい実験事業やモデル事業は熱意のある後者の学校に廻ってくる。前者の学校が「モデル事業」を引き受けることは稀である。校長さんががんばって研究指定を取って来ても、職員の不平が増すだけで、時には「袋だたき」にあう。

◆ 3 ◆ 「学校評議会」の権限

「学校評議会」構想は、一般外部の「評議員」に、教育評価はもとより、学校運営の決定権や、時には人事権まで認めている。その意味で「学校評議会」は、従来の学校慣習を根底からひっくり返す革命的なものである。「評議会」は、校長の権限を縮小し、従来、学校運営を超法規的に陰で牛耳って来た「職員会議」の影響力を排除できる。それゆえ、学校再生の一般論としては何も間違っていない。アホな校長が停滞の「癌」であることは

分かっている。政治イデオロギーで凝り固まった怠惰で身勝手な職員会議が戦後の義務教育を沈滞させて来た多くの事例があることも分かっていることだからである。これらを打破するには学校に「市民の常識」を取り戻すことが不可欠である。それゆえ、「学校評議会」を必要とするのは、「市民の常識」が欠けている学校である。「市民の常識」が打ち破るべきは「閉ざされた学校」であり、「停滞している学校」なのである。市民の意見を必要とし

ているのは、ほとんど研究指定校になったこともない、また、極力、モデル事業の指定を回避しようとしている学校である。当然、教員の意識は沈滞し、子どもの活力・学力は停滞している。しかも、そのような学校は、現状の情報は決して外部には公開しない。残念ながら、保護者の大部分は他校と自校との比較の手段を持たないので学校に対する批判力は皆無に近い。そうした学校は、学校開放も

おざなりで、外部との接触も少なく、すべての面で極めて風通しが悪い。多くの場合、教育行政も、校長も、職員会議の意向を聞かなければ重要事項の決定はできない。「学校評議会」の導入は、そのような学校にこそふさわしいのである。断じて、優れた実践に邁進している学校に導入してはならない。理由は以下の通り簡単である。

◆ 4 ◆ 「評議会」の有害性

「学校評議会」は時に諸刃の剣である。「学校評議会」に期待されているのは市民の常識であり、それ以上では無い。市民の常識が機能するのは「停滞している学校」だからである。

優れた学校は、その「開放性」においても、保護者との交流においても、情報の開示においても、外部評価の導入に付いても、当然「市民の常識」はクリアしている。

一方、外部の「評議員」の多くは教育の素人であり、教科指導の経験はない。時には地域における少年指導の現場実践も積んではいない。それゆえ、評議員には「市民の常識」以上のものは期待できない。それゆえ、「評議会」が提示する素人の常識で優れた学校の教育実践をかき回してはならない。「優れた学校」が「より優れた学校」になるためには、一層の緻密な教育戦略と指導方法・技量の向上と教員集団の団結とチームワークである。しかし、通常、「評議員」は教育分野における個別の指導方法は分かってはいない。チームティーチングの重要性も体験していない。教育現場の苦労も共にしてはいない。何より子どもとの信頼関係が無い。その素人群に、優れた教育実践を続け、教職員一丸となって日々の指導に励んでいる学校の運営権、人事権まで渡そうというのは、狂気の沙汰である。

今回は偶然、そのような優れた学校に「学校評

議会」を導入するという話を聞いた。メディアを賑わす実験校であればあるほど、「評議会」はかならず使命感に駆られて新しいことを「やりたがる」。そうなればようやく自分達のやり方を見つけて頑張ってきた教職員はかならず評議会と衝突する。教育実践に没頭してきた教職員は現場感覚なき議論に疲れ、評議会の「陳腐・凡庸かつ市民の常識を出ない」決定に振り回される。校長の経験やリーダーシップは生かされることなく、意志決定プロセスに屋上屋を架した学校は混乱し、教員は評議会の思い付き提案に振り回され、やがて意欲を無くして行くであろう。残念ながらこの学校に筆者の予想が適中することは疑い無い。

教育活動が充実していれば、必ず子どもの変容結果が見える。1年間すぐれたプログラムを継続すれば間違いなく子どもの体力は変化する。我慢強さも学力も、規範意識も、発表や表現の力も変容する。現段階で、子どもの変容がはっきりと「向上」を示している学校に「評議会」は全く不要である。

「学校評議会」が必要なのは、「陳腐・凡庸かつ市民の常識」レベルにすらも達していない学校である。残念なことは、すぐれた学校は少なく、反対に、「市民の常識」に達していない学校は無数にあるのである。

◆◆ 徒労のアンケート — 悪しき「員数主義」 ◆◆

アンケート調査は民主主義における学問の落し子である。生涯学習分野の多くの担当者は、男女共同参画でも、子育て支援でも、ボランティア活動でもアンケート調査をすれば何かが分かると錯覚している。それゆえ行政はアンケート調査に膨大な金と時間をかける。時に、学校教育や子ども会では、子どもにまでアンケート調査を行なう。関心のない人間に関心事項を聞いても答は出ない。興味のない人々にやりたいことを聞いても答は出ない。改革を考えたこともない人々の意見を聞いたところで改革の方向が分かる筈はないのである。まして子どもに教育や学習の目的に関することを聞いて何になるというのか？

民主主義が建て前である以上、人々の意見を聞く事が大事でないと言うつもりはない。しかし、分からない人の意見をいくつ集めても答はでない。特に、子どもの場合、意見を聞いてはならない場合も多い。聞けばそれが「多数決」や「民意」という正義に格上げされてしてしまう。アンケートに反対勢力の意見を取り入れれば、当該事項を実践しない理由がいつも簡単に作れる。それが悪知恵であり、作られた「意識の壁」である。アンケート調査の落とし穴がそこにある。

いわゆる「抵抗勢力」の意見を集めて現状改革の方向性を求めても目的が達成できる筈はない。この時、アンケート調査は、民主主義を看板にした単なる「員数主義」に過ぎない。そこから出た意見を集めて政治をすれば、「衆愚政治」と呼ばれる。自治体の多くの施策、なかんずく、男女共同参画も、子育て支援も、前に進まないのはそのためである。

それ故、教育関係者や生涯学習分野で行われる多くのアンケート調査は金と時間の無駄であることが多い。2005年1月6日(木)、日経は全国学長調査の結果を発表した。「株式会社大学を容認するもの」42%、「大学破綻が相次ぐ」と予想す

るもの89%と一面に見出しが踊った。最も新しい「株式会社大学」を最も古い体質の大学のトップに聞いたところで答は最初から決まっている。新しいものなど認める筈はないのである。「株式会社大学」を認める学長の中でも「内容により認め、私学助成も認めるべき」としたのはわずか13.2パーセントに過ぎない。今頃になって、「大学の破綻が相次ぐ」という予想もいい加減なものである。子どもの数が減っているのに大学定員を拡大して来たのはほかならぬ大学自身である。全入時代がくることは統計的に予測出来たにもかかわらず、大学の定員拡充を認めて来たのはほかならぬ文部行政である。今ではどんな3流大学にも大学院まである。私学も含めて日本の大学は、税金で補助し、税金で運営している以上、大学の破綻は国民の負担で処理しなければならない。その時、教育学はすでに経済学なのである。2005年5月29日(日)には、同じ日経に「少子化と育児支援策についてのアンケート」の結果が紹介された。筆者にとっては質問も月並み、答も月並みの一語に尽きる。調査などやらなくても答の出方は分かっている筈である。もちろん、新聞社は「データ」という名の学問の衣装が必要なのである。少子化の本質は別項「女学生の質問」で書いた通りである。「育児と仕事 両立に壁」などという結論は最初から分かっていることであり、「男の育休で賛否」が分かれることは男社会に聞けば当たり前のことである。男女共同参画の「啓蒙活動が不足している」とか「出産後に再び就職」を女性の半数が望んでいる、とかいう大新聞の見出しは、当たり前で、能が無くて、無知で、恥ずかしくて「風の便り」には書けない。

何度も書いて来たが「抵抗勢力」に聞いても現状打開の方向は見えない。当然、大学に聞いても大学改革の方向は出ない。男支配の文化に満足している「変わりたくない男」に聞いても男女共同参画推進の答は出ない。

女子学生の質問

『女はなぜ子どもを生まないのか？』

第24回中・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会の特別企画『子育て支援サミット』のダイアログの中で会場の女子学生から質問が出された。趣旨は単純明快であった。昔の母は沢山の子どもを生ま育てた。今の母は社会が少子化の防止を政策にしなければならぬ。なぜか？どこに原因があるのか？お二人の町長と一人の教育長、登壇者はいずれも男であった。登壇者の答は、少子化の原因は「コミュニティサポート」の衰退と消滅にある、という一点に収斂した。学生の問いは根源的であったが、登壇者の答は現象的であった。司会者としては進行の判断に迷ったが、彼女の質問の答はそもそも「複合的」なのでやむを得ず女子学生の不満(だったであろう?)を残したまま先へ進んだ。

筆者がそのように感じた根源的な理由の第1は女性が獲得した「自由」と「選択」の問題である。今の女性が子どもを生まない理由は女の「自由」にもっとも深く関係している。昔の女性はその「自由」を手にはしていなかった。子どもを生むことは、「選択」の余地のない「義務」であった。「嫁して3年子無きは去る」の文言通り、子どもを生めない女は「離縁」されても抗議はできなかった。文化はそれを「よし」としたのである。

理由の第2は子育ての難事業に関わる。難事業ゆえにその「選択」は女性の意志に関わり、女性の自由に関わる。子どもは「産みの苦しみ」を経て、「手塩にかけて」育てる。育児は喜びもあるが、苦労も伴う一大事業である。その一大事業の「創業」は女にしかできないのである。したがって、女性がこの一大事業に取り組むか、否か、は「自由」を手にした彼女の出産を促す男と文化と社会の意志に懸かっている。「家事」も「育児」も、大部分を女に背負わせておいて、さらにこの難事業の「創業」に戻れということが果たして「フェア」か？少子化の結果を見れば明らかなように、日本社会はすべての点で「創業者」への配慮が落第である。

理由の第3は「子育て」以外の選択肢の登場である。「職業」から始まって、夫婦生活、あそび、消費にいたるまで、暮らしの中の選択肢は多様になった。「女の自

由」と「男の支配と既得権」が衝突すれば、結果は「非婚」であり、「晩婚」であり、「無産」であり、「少産」であり、あるいは「離婚」である。これらの現象を引き起こす具体的な動機や状況は様々であるが、根源には、男が支配して来た社会が、どこまで女性の「自由」と子育ての「難事業」のバランスを保障できるか、否かの問題に帰着する。今や、「筋肉」にもものを言わせた労働の時代は終わった。戦争とやくざの社会を除けば「腕力」にもものを言わせる時代も終わった。さすがに男社会も「ばか」ではないから、「腕力」にもものを言わせたDVやレイプは重大な犯罪であるとしてやく規定した。文明は成熟し、女性が人類史を通じて負って来た「筋肉労働」のハンディキャップはほぼ消滅した。女性も自らの自由のために果敢に戦ったが、当然、男社会の発想も変わった。それが「男女共同参画」のスローガンである。しかし、実質的な男女共同参画は進んでいないのである。

理由の第4は社会も、男も、女性の出産・子育てに感謝が足りない。「難事業」と取り組んでいるのに、文句をいわれ、けちを付けられ、評価も、協力もほとんど得られない、というのでは子どもを生む方が「アホ！」というものである。女はそのことに苛立ち、男はそこが分かっていないのである。少なくとも、男社会は出産-育児に対する評価も感謝も形にはしていない。

理由の最後は子育て支援システムの不備である。

日本社会は、相対的に、「年寄り」には膨大な金を使っているが、「育児支援」には金を使っていない。保育所における待機児童は解消していない。全国どこを見ても、幼保一元化は全くといっていいほど進展していない。30年以上も続いている「学童保育」の貧しさを見れば、働く女性の支援とはほど遠い。学校がそっぽを向いた「子どもの居場所」づくりや福岡県の「アンビシャス広場」事業などの効果は問題外である。登壇者が指摘したコミュニティにおける子育てサポートの不在という問題はここで初めて登場する。枝葉末節とは言わないが、少子化の根本原因からは遠いのである。しかし、具体的にはここからしか行政の取り組みは始められない。登壇者の答が引きずられたのはそのためであろう。

ななめ読みの感想

—平成17年5月29日日経新聞日曜版—

目まぐるしいスケジュールが続いた。多忙な日々は、テレビは「ながら視聴」、新聞は「ななめ読み」がやっつである。それでも己のアンテナを張っている時は思いがけず関心のある情報に巡り会う。5月29日に立ち読みした日曜版がそれであった。

読者俳壇／読者歌壇

遠くアメリカからの久々の懐かしい来訪者が去って我が家は森閑となった。心は虚脱して、いささか茫然自失の状態であったが、仕事は山積みである。気を取り直して日常のスケジュールに戻れば、約束した仕事の締切りは目の前である。溜まった新聞はごみ出し用に積み上げたが、2～3日分だけでも目を通したいとななめ読みをした。

見るともなく見た黒田杏子選の読者俳壇の中に『前世も来世も知らずほととぎす』（高知県の浜崎浜子さん）とあった。森閑とした我が家を詠んで下さった句だと思った。栗木京子選の読者歌壇には、「不平不満不安理不尽尽きねども不幸とだけは言いたくはなし」（西東京 水島孝雄さん）とあった。老いの身にはいろいろあるが、同感である。

「風見鶏」

2ページ目のコラム「風見鶏」には政治部の丸谷浩史氏が書かれた「小泉流」こそ常識の一文があった。小泉総理が一番世間の感覚に近く、議会運営も常識に則って行っており、昨今メディアを騒がせた総務省幹部の交替劇もアメリカでいう「政治任命」であり、民主党の小沢一郎氏の言う「ポリティカル・アポインティー」に重なるという指摘であった。お説の通りである。学校開放の建て前だけを言っ、一向に学校の開放に踏み切らない文部

科学省幹部の交替も政治的に行なってはいかがか？学校教育法第11条の「体罰禁止」の項もここまで少年非行や荒れた学校が日常化した現在では、ポリティカル・アポインティーによって抜本的な検討に入るべきである。他者に多大な被害を及ぼすルール違反者に物理的な処罰をもって対処しない社会組織などあり得ないのである。この国はまさに「人権」が大流行りであるが、被害者の「人権」はあまりに軽視されているのである。

「私の履歴書」

最後のページは千葉商科大学長の加藤寛さんの「私の履歴書」である。普段、時間のある日で

もめつたに読むことはないが、「親のかたき」という表現が目に入った。福沢諭吉は「門閥制度は親の

かたきでござる」と言ったという。「郵政民営化情報システム検討会議」の座長を務めた加藤さんにとっては「官主導」は親のかたきでござる、ということであった。筆者は知らなかったが郵便局は近代的会計基準に則っておらず、未だにどんぶり勘定であるという。郵便局の預かり資産は350兆円にもなるのに、個々の郵便局会計は小遣い帳なみの「単式簿記」だという。この一点だけでも郵政民営化の必要性は明らかであると指摘する。加藤さんのかたきは郵政事業に立てこもっている。日本人の個人資産の4分の1は官主導の「御用金」であり、経済合理性など無関係に財政赤字補填や財政投融资に使われる、という。実に分りやすい解説であった。郵便局のサービスがへき地に行き渡らなく

なるとの「反対派」の説明は加藤さんの明解な論理を隠ぺいする機能を果たしている。

加藤さんの「学問する目的」は国民の福祉を増大する方策を探ることである。加藤さんはソ連経済の研究から、「官主導」の経済では国民福祉は増大しないと論証したという。それゆえ、日本経済から官主導の部分を排除して、真の市場経済に転換させることが国民福祉増大への道だと確信している。筆者が関わる分野でも、「官主導」のプログラムはすでに役に立たなくなりつつある。加藤さんの論理における「経済」を生涯学習と置き換えても間違いではない時代が到来しつつある。普段は穴埋め記事の多い退屈な日曜版から思いがけずいろいろなことを学んだ一日であった。

●●● お知らせ 第57回生涯学習フォーラム ●●●

フォーラム実行委員会では第25回中国・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会を期して記念出版を行うため編集の準備を開始しています。そのため当分の間、各地の事例発表のお招きはお休みとし、代わりに、過去の「交流会」の発表の中から注目すべき事例を選び、その意義と内容・方法を実行委員の持ち回りによりそれぞれが小論文の形にまとめて発表する形式を取ります。

日時：平成17年6月18日(土)15時～17時、
のち「センターレストラン『そよかぜ』にて夕食会」

場所：福岡県立社会教育総合センター

テーマ及び事例取りまとめ者：

- 1 正平辰男（仮）「生活体験学校が問うたもの」(東和大学)
- 2 永渕美法（仮）「NPO コーチズの取り組み」(九州女子短期大学)
- 3 三浦清一郎（仮）「生涯学習革命」の30年 実行委員座談会総括

フォーラム終了後センターレストランにて「夕食会」を企画しています。ふるってご参加下さい。準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。(担当：恵良)092-947-3511まで。

MESSAGE TO AND FROM

メッセージをありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがございましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★ 島根県雲南市 和田 明様

旧吉田村の株式会社「鉄の歴史村」のこと松島さんからお聞きいたしました。先生のご奮闘ぶりは生涯学習センターの錦織さんから伺いました。昼食時の輪の中で、庄屋敷の「若槻屋」にも行ってみたいね、と話題になりました。参加各県の中で今年が一番の元気は島根県だったと感じました。二つの生涯学習センターの方々が揃い、浜田さんのご紹介で出雲の小学校の元気澁淵の研究主任にもお目にかかりました。益田市の壮年達は一度”ポシャった”「綺羅星7」を復活させて、「リベンジだ！」と気焰を上げていました。楽しみです。また今回は、生涯学習課長の澤さん以下県庁の皆さ

んにもお目にかかり、島根で何かが始まり、何かができそうな予感を感じました。浜田市の中川さんが主催する NPO 法人「リベロ」の展望は、生涯学習事業の「経営」が大きくかわることを予感させ、少なからぬ方々に大きな衝撃を与えました。島根大学の学生は前夜祭から出席し、琉球大学や福岡教育大学、九州女子短期大学の学生諸君と活発な「大会外交」を展開し、インタビューダイアログで大事な質問を発し、将来が楽しい風景を垣間見ました。お見せしたかったですね。先生のご不在だけが心残りでした。

★ 熊本県 上天草市 池田光利 様

お出かけいただきありがとうございました。息子さんのことも、安芸太田の江川さんも、先生のまかれた種が立派に育ちました。「労働」の終りは「活動」の終りではない。このことが高齢社会で一番大

事であつ一番難しいことかも知れません。来年の大会も再び元気にあいまみゆることを約束しましょう。

★ 福岡教育大学 竹田舞姫 様

インタビューダイアログでの御質問は核心を付いていました。男達の答に満足しなかったのではないのでしょうか。僭越ながら今回私見を「風の便り」65号の小論にまとめてみました。コミュニティの子育て支援を充実しようが、子育てネットを立ち上げようが、出産奨励金を出そうが、現状行われている

施策の程度では到底「少子化」は止まらない。自覚すると、しないとに関わらず、女が子どもを生まない理由は、「非婚」から「離婚」まで、彼女達の「自由」の行使であり、変わらない男支配の文化への「積極的-消極的」抗議に外ならないというのが私の診断です。

今回は初めての岡山県からの発表の実現にお力添えをいただきまことにありがとうございました。また、ようやく念願がかなって岡山の実行委員さんも決まりました。最終総括で福岡の正平教授がご提案になったように、来年の課題は「市町村合併

がもたらした生涯学習の光と陰」、大量の定年者を迎え入れた際の日本社会における「年寄りの居場所」が問題になることでしょう。各県からの問題提起を楽しみにしております。遠いところを本当にありがとうございました。再会を楽しみにしております。

過分の郵送料をありがとうございました。

★★

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ● 島根県雲南市 和田 明様 | ● 島根県松江市 後藤康太郎様 |
| ● 福岡県宗像市 赤岩喜代子様 | ● 島根県松江市 神門 三郎様 |
| ● 広島県府中町 岩田京子様 | ● 福岡県筑前町 宮野 哲美様 |
| ● 高知県高知市 明神宏和様 | ● 島根県松江市 澤 アツ子様 |
| ● 沖縄県石垣市 崎原 喬様 | ● 熊本県天草市 池田光利様 |
| ● 島根県津和野町 増田清子様 | |



編集後記 『時間消費の質』



季節は帰らない
誰も代わりに生きられない
力を尽くさねば生きてことにはならない
全力で疾走すれば
苦しい息の向こうに希望が見える
気力もエネルギーも不燃焼のままに時間ばかりが流れてはいないか
希望や意志や沈潜や独歩
これらの言葉がいまだに息づいているなら
始めてみないか
朝の二時間
志の似通ったものが
ただ黙って本を読むだけのことだが

ある。当時は自覚していなかったが、「同志」は「志縁」によって形成される。人生をできるだけ悔いなく過ごすためには「時間消費の質」の似通った人々と暮らすしかない。「時間消費の質」の共通性とは、生きる上での価値観や感情が似ており、類似の風景を好み、似たような不正や不法に怒り、悲しみや淋しさを分かち合うことができることである。

学生の指導には長い時間と多くのエネルギーが必要である。それゆえ、偶然割り当てられた学生と人生の波長が合致する保障は少ない。波長が合わない学生の卒業論文や就職指導にはどうしても気合いが入らず、給料分だけの義務的任務で終わってしまう。せつかく一期一会の縁によって帰らぬ季節を共に過ごすのであれば、自分で選別して、未来の同志を育てたい、という感覚的な発想が底流にあった。学生もまた我が「同志」であつ

上記は筆者の福岡教育大学の時代に学生に呼び掛けた「早朝読書会」の参加者募集の一文で

て欲しかった。斯くして朝の6時から集合する「早朝読書会」は未来の同志に巡り会う有効な仕掛けとして機能した。

人間関係の基本は「志縁」である。高齢社会の真只中で年をとった今、こんどは明確な思想として、確信を持って老後の交友関係の質を考えるようになった。平均寿命世界1の日本では、定年後の生涯時間は20年である。現行の生涯学習や福祉プログラムが提供する「ゲートボールやグラウンドゴルフと歌と踊りと風呂」だけで残された20年を暮らせば、脳細胞が死滅するか、当方の気が狂う。問われているのは「時間消費の質」であり、欧米流の「Quality of Life」の中身である。

先日、ある団体から近隣コミュニティの「近所付き合い」がもっとも重要である、という趣旨で講演のご依頼があった。しかし、筆者は「近所付き合い」がもっとも重要であるとは考えていない。「志縁」による「同志的」人間関係がもっとも重要であると考えている。「地縁」と「志縁」の共通点はない。それゆえ、志が共通で、波長が合い、人生の価値や感情を共有できる仲間が常に近所にいる可能性は少ない。本当の「仲良し」は、線路の向こうにいて、隣町にいて、時にはもっと遠いところにいる。依頼者には自分の考えを御説明申し上げて丁重にお断りした。”「男女共同参画」一つをとってもあなたの人生の同志は御近所にいらっしゃいますか”、と尋ねたら、依頼者も筆者の考えに同感であるとおっしゃって、再度講演「テーマ」の変更を実行委員会にお諮りになった。しかし、協議の結果は否決されたので今回の講演依頼は無かったことにして下さいとご連絡があった。それでいいのである。年をとった今、残されたわずかの時間を自分の意

に添わない仕事でいやいや消費したくない。

第24回の大会直後、アメリカから久々に娘が帰国した。彼女には山口県の自分の講演の仕事場を見せ、毎日わが友犬と散歩にでかける「カイザーの森」の細道を共にくまなく歩き、公民館の英語ボランティアの授業に参加させ、日課のプールと一緒に泳ぎ、愛好する隣町の温泉に出かけ、行きつけの「そば屋」の蕎麦を食い、妻は老後の生活設計を語った。宗像「ごはんや」だけは案内の機会を逸したが、できるだけ具体的に我ら夫婦の日常の紹介に務めた。「カイザーの森」の丘の頂きにはどんな風景が広がっているのか、どんな風が吹いているのか、「時間消費の質」はメールや手紙だけではなかなか伝えることが難しい。どこまで共通の時間を持てたか、どこまで「時間消費の質」の同質性願望を伝え得たか、自信はない。しかし、今の彼女には自らの「時間消費の質」を保障するものが日本にはないのであろう。「アメリカには個性を認め、自分を発揮させるものがあるのです」と公民館の英語学習者達に語って、疾風のように来て疾風のように再びアメリカへ帰って行った。

季節は帰らない。

誰も代わりに生きられない。

力を尽くさねば生きたことにはならない。

私の感想は遠いあの頃と同じである。

『編集事務局連絡先』 (代表) 三浦清一郎 住所 〒811-4145 福岡県宗像市陵巖寺2丁目15-16

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。ご希望の方は、『編集事務局連絡先』まで、90円切手7枚、または、現金630円をお送りください。

尚、誠に恐縮ですが、インターネット上にお寄せいただいたご感想、ご意見にはご返事を差し上げませんので御寛容にお許し下さい。『オンライン「風の便り」』

<http://www.anotherway.jp/tayori/>